

ベルリン在住日本人 アーティストの活動 — 定住と移動のはざままで

立教大学社会情報教育研究センター 助教
高橋かおり

k.artkhs@rikkyo.ac.jp

山岡記念財団 第4回若者文化シンポジウム 20200219
@京都大学文学部校舎2階 第三講義室

自己紹介

■ 高橋かおり

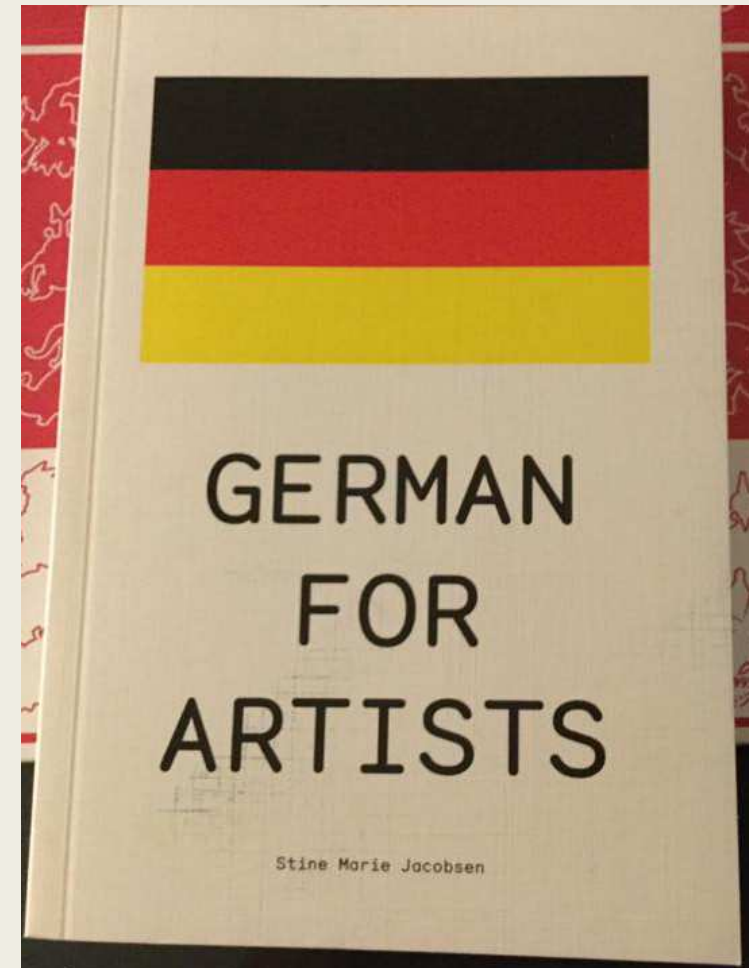
- 専門：社会学（文化社会学、芸術社会学）
- 芸術活動に関わる人について、活動内容、キャリア・職業選択、ワークライフバランス、ジェンダー、労働の観点から研究
- 現代社会における「芸術家／アーティスト」の定義の語られ方を探求（プロフェッショナル／アマチュア、仕事／趣味／労働）

助成課題：「ドイツ在住日本人芸術家のキャリア形成に関する比較研究」

- 共同研究者：相澤真一（上智大学／教育社会学）
- 2017年度に実施した欧州（ドイツ・フィンランド）でのクラシック音楽家調査の継続調査
- 本助成課題におけるキーワード
 - ベルリン
 - ヨーロッパの中でも文化拠点の1つ
 - ビジュアルアート／パフォーマンスアート
 - 音楽以外のジャンルではどうなっているのか
 - 伝統的（クラシック）ではなく現代的な分野
 - 憧れや権威付け以外の理由で来る人がいる

ベルリンのアーティスト研究

- ロンドンやニューヨークなど制度化され資本主義が支配する街にはない魅力が対比的に論じられる
 - 「20年前のニューヨーク」というアーティストの実感
- 比較研究の文脈で蓄積がある
 - ロンドンとの比較
 - クラシック音楽 (Scharff 2018)
 - ファッション (McRobbie 2016)
 - ニューヨークとの比較
 - ビジュアルアート (Jacob 2009)
 - フィンランド出身者の研究
 - ヴィジュアルアート (Hirvi 2015; Hautala & Nordström 2019)



調査目的・問い

- ベルリンに拠点を移すことを、日本人芸術家はどのように意味付けているのか
 - 一時的な余暇／非日常ではなく日常としてのドイツ経験をとらえる（藤田2008の更新）
- グローバリゼーションの中での芸術家のアイデンティティの探求
 - 【環境要因】日本の芸術創造の負の面、それ以外の環境要因（プッシュ要因）／ベルリンの魅力（プル要因）
 - 【経験の解釈】ドイツ・ベルリンに居住することによって、どのように日本での活動を相対化するのか
 - 【目標設定】複数の拠点を経験したうえで、今後の活動の場所や鑑賞者をどのように設定しているのか

本研究の持つ意味

- モノやコンテンツの移動だけではなく、作り手の移動という観点から文化交流の一端を明らかにする。
- メディア環境の発達によって／にもかかわらず、複数の拠点を行き来する若者の生き方を示し、文化交流を実践する人々の新たなライフスタイルを詳述する。
- モノや作品として結実する以前の活動やプランを見ることで、今後の日独文化交流における可能性や問題を考察する。

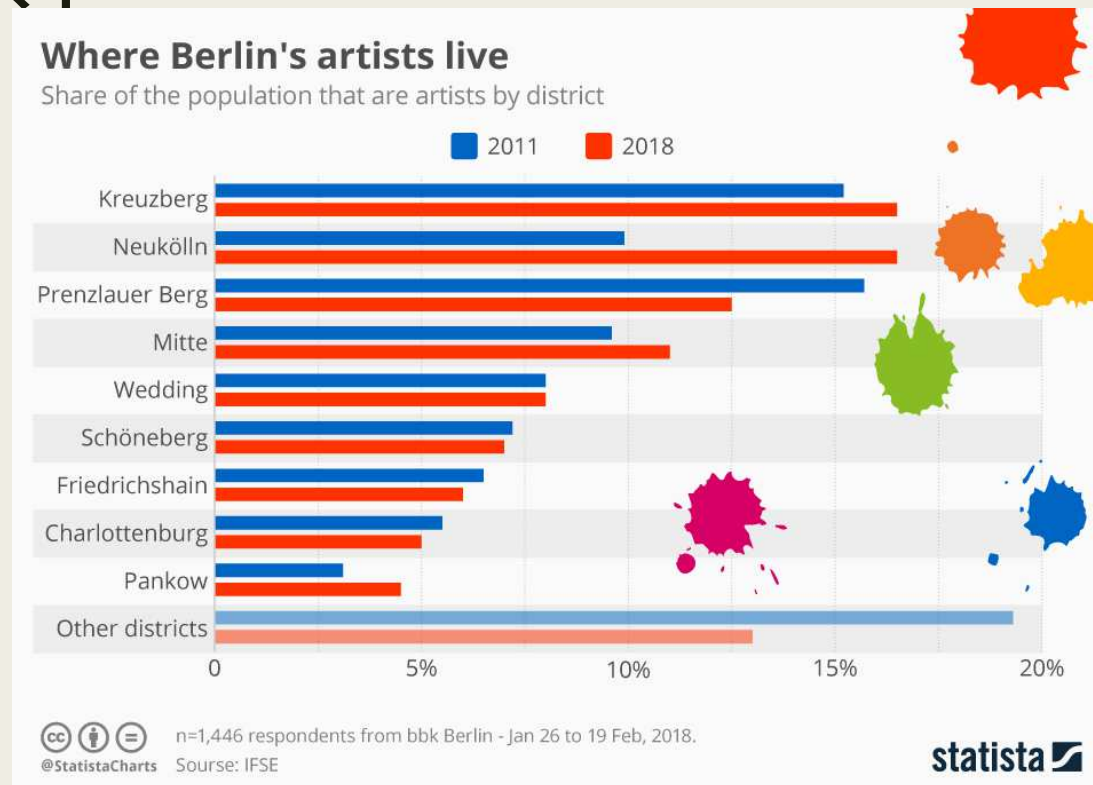
調査方法：機縁式聞き取り調査

- 日本で芸術の高等専門教育を受けた後、または実践経験を積んだ後、ベルリンに拠点を移した芸術家
 - 基本的に現在学生である人は除外
 - 何らかの仕事をしている（しようとしている）人
- 調査者（高橋）の過去の調査協力者から機縁式に紹介
 - ベルリン調査時期：2019年8月25–30日
 - 滞在中8名聞き取り、別途日本で3名聞き取り。計11名
 - 平均1時間半程度（最短1時間強、最長2時間半）
 - 関係するスタジオや工房、レジデンス施設なども見学
 - 一部を除き、高橋と相澤で実施。

協力者一覧

仮名	専門	性別	年代	ベルリンに来た年	ドイツでの専門教育	ワーホリ取得	ドイツ関連助成金・奨学金
A	美術	男性	40代	2013-	○	×	○
B	舞台芸術（技術）	男性	30代	2018-	×	○	×
C	美術	女性	30代	2012-	○	×	○
D	美術	女性	30代	2017-	×	×	○
E	舞台美術（俳優）	男性	50代	2013-	×	×	×
F	美術	女性	30代	2013-	×	×	○
G	美術	男性	40代	2019（現在帰国）	×	×	○
H	美術	女性	30代	2007-	○	×	×
I	音楽	男性	30代	2019-	別の国で経験有	×	×
J	美術	女性	40代	2010-（一時帰国有）	×	○	×
K	音楽	女性	30代	2011-（現在家のみ）	別の国で経験有	×	×

参考：ベルリンは1000人中2.16人がアーティスト



<https://www.statista.com/chart/18818/share-of-berlins-population-that-are-artists/>

考察

1. ドイツに来るパターン
2. ドイツ・ベルリンを選んだ理由
 - 海外／ヨーロッパであること
 - ドイツであること
 - ベルリンであること
3. 日本人のメリット／デメリット
 - 言葉（ドイツ語・英語）の問題
 - 日本人とのつながり
 - 日本人／アジア人であること
4. 芸術活動を海外で続けること：アーティストビザ取得
5. アーティストとしての生き方：ベルリンの位置づけ

1. ドイツに来る主なパターン

1. 専門高等教育機関への入学
 - 入試を受けて学士や修士、マイスターを取得
2. レジデンス施設の利用
 - 例： *Künstlerhaus Bethanien*
 - 文化庁在外研修、各種民間助成金
3. ワーキングホリデーを利用
 - 取得しやすい
 - 知り合いがいる場合もいない場合もあり

2. ドイツ・ベルリンを選んだ理由

- 海外／ヨーロッパであること
 - 一度は海外に出てみたい
- ドイツであること
 - ドイツでの活動経験のある先輩や教員の影響
 - ドイツ人アーティスト／ドイツの作品への感銘
 - 経済面の負担が少ない（DAADの奨学金、学費がかからない）
- ベルリンであること
 - ビザがとりやすい
 - 友だちがいた
 - 大陸の拠点
 - 適度な大きさの都市／街が興味深い（変化し続ける）
 - 作品制作に必要な要素があった
 - 受け入れ施設／合格した大学があった

日本人のメリット／デメリット

①言葉（ドイツ語・英語）の問題

- 来独の時点でドイツ語が全くできていない人もいる
 - 大学入学のためには基準を超えないといけない
 - 企業や団体就職のためには、ドイツ語が必須
- フリーランスであれば英語でできる仕事もある
 - ドイツを一時的な場所にとらえている人ほど英語で生きている
 - 国際的ネットワークの物理的拠点としてのベルリン
- 日本語圏で回る仕事もある
 - 展示の搬出入、作品制作アシスタント

日本人のメリット／デメリット

②日本人とのつながり

- 日本の大学時代のつながり
 - 助成 (DAAD) でのつながり
 - 語学学校
 - SNS (*mixi, FB, twitter*) ・ウェブサイト (あっとベルリン・MixB)
 - バイト先 (ワーホリ・学生)
 - ルームメイト、シェアメイト
- 必ずしも避けるべきとはいえない
- ⇔日本人との交流は避けつつ、日本との交流は絶たない (長澤監修2005:15,35)

芸術活動を海外で続けること

③日本人／アジア人であること

- ベルリンは外国人が多い街ではある
 - ドイツ語を喋りかけても英語で返される
- 作品がアジア的／日本的なものと解釈される
 - 震災後は特に

この時代に居住を海外に移す理由

- メディアを通じて作品だけ／情報だけは得られる
 - 作品を通じて旅ができる
 - インスピレーションが湧く
 - 生活が（精神的）豊かになる
- 東京（日本）では暮らしを考えてしまう
 - 生きていくことが無理ではない

暮らしやすい理由

- 東京と比べると.....
 - （高くなったとはいえ）物価・家賃が安い
 - （借りにくいとはいえ）アトリエがある
- 収入がそんなになくても生きていける

芸術活動を海外で続けること ：アーティストビザ取得

- 学卒後、ワーキングホリデー終了後に、滞在を続ける場合、アーティストビザを申請することになる
 - フリーランスビザの1カテゴリー
 - 芸術関係の仕事の収入で生活することが原則
 - 推薦書やポートフォリオ、十分な預金が必要
 - KSK（芸術家のための社会保険）に加入
- 「芸術家である」という承認の1つ
- お金が無くてもアルバイトができないという縛りもある

ベルリンはアーティストビザがとりやすいという都市伝説（？）

- 公式にも歓迎されている
- アーティストの協同組合のサイトには.....
 - 「ベルリンは「芸術と映画の都」と見なされているため、芸術の経済的な関心から、自営業のアーティスト、音楽家、俳優、映画関係者やそのほかの人々は、ベルリンの滞在許可が与えられます。」
 - https://www.bbk-kulturwerk.de/con/kulturwerk/front_content.php?idart=3193&idartlang=3575&idcat=174&changelang=7

暮らし続けにくい理由

- しかし人気の街なのでアーティストは供給過多
- 経済的に豊かな街ではないので、仕事は多くない
- 流動性が高い、ある程度の年数いると飽きてくる

アーティストとしての生き方：ベルリン の位置づけ

■ 複数拠点のうちの一つ

- 「東京とベルリンが拠点」というプロフィール
 - →日本とのつながりを保つ
- レジデンスできる場所ならどこでも
- ずっといるとは限らない／決して入り込めない
- ヨーロッパの拠点

■ ベルリン・ドイツに住み続ける

- パートナーがドイツ人
 - 日本とドイツをつなぐ

芸術創作への影響

- 生活環境の変化は創作にも影響する
 - 例：それまでは日本の伝統的な「木工」の文脈を説明をした上で作品を解釈してもらっていたが、ドイツではその文脈は作品から理解される。さらに作品を「建築」や「インスタレーション」と位置付けるようになる
- 異なるジャンルとの出会い
 - クラブカルチャー／パフォーマンス
 - 他ジャンルのアーティストとのコラボレーション

自分の活動を水路づける

- なぜベルリンに来たかを話してもらおう
 - そのときそのときで目の前に来た選択肢を選んだという人もいるが、長期計画の人もいる
 - 進学／結婚／出産などのライフイベントにおける選択
 - 自分以外のことを考える／自分だけのことを考える

今後の日独交流に向けて

- 商業化されにくい活動やものとして流通しにくいものの交流の種をどう広めていくのか
- 草の根の交流
- 作品を作る作り手／送り手への着目
- 日本でアーティストやクリエイターが住みにくい、ことは今後の文化交流において解決しなければならない課題では？
 - 生産物や作品は歓迎されているのに、その創作環境は必ずしも良くない
 - 他国に移る選択／経験を言語化していく
 - 制度の違いを知ったうえで自分の目標や創作したいもののために選択する
 - 帰国することは終わりではない

参考文献

- 藤田結子、2008『文化移民—越境する若者とメディア』新曜社
- Hautala, Johanna, and Paulina, Nordström, 2019, “Creative city, mobility, and creativity: Finnish artists in Berlin”, *Mobilities*, 14(6):859-874.
- Hirvi, Laura, 2015, “A suitcase full of art”: Transnational mobility among Berlin-based visual artists from Finland,” *Ethnologia Europaea*, 1:98-113.
- Jakob Doreen, 2009, *Beyond creative production networks. The development of intra-metropolitan creative industries clusters in Berlin and New York City*, Berlin: Rhombos.
- 長津忠徳監修、武蔵野美術大学 + BNN編集部編、2005、『デザイン／アート留学のすすめ』BNN新社
- McRobbie, Angela, 2016, *Be creative : Making a living in the new culture industries*, Cambridge : Polity Press.
- Scharff, Christina, 2018, *Gender, subjectivity, and cultural work: the classical music profession*, Abington: Routledge